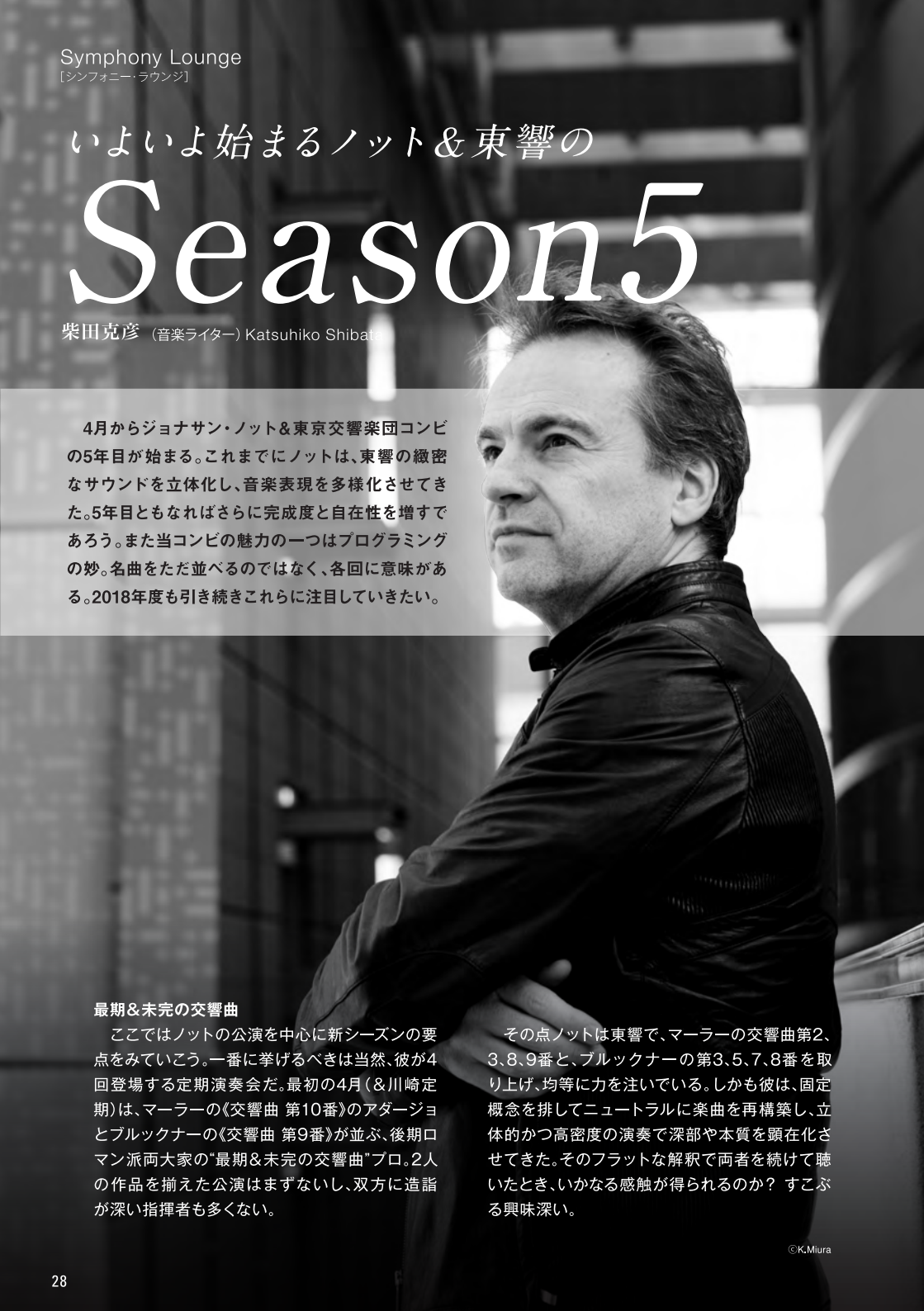
いよいよ始まるノット&東響の Season5

柴田克彦（音楽ライター）Katsuhiko Shibata

4月からジョナサン・ノット&東京交響楽団コンビの5年目が始まる。これまでにノットは、東響の緻密なサウンドを立体化し、音楽表現を多様化させてきた。5年目ともなればさらに完成度と自在性を増すであろう。また当コンビの魅力の一つはプログラミングの妙。名曲をただ並べるのではなく、各回に意味がある。2018年度も引き続きこれらに注目していきたい。



最期&未完の交響曲

ここではノットの公演を中心に新シーズンの要点をみていこう。一番に挙げるべきは当然、彼が4回登場する定期演奏会だ。最初の4月（&川崎定期）は、マーラーの《交響曲 第10番》のアダージョとブルックナーの《交響曲 第9番》が並ぶ、後期ロマン派両大家の“最期&未完の交響曲”プロ。2人の作品を揃えた公演はまずないし、双方に造詣が深い指揮者も多くない。

その点ノットは東響で、マーラーの交響曲第2、3、8、9番と、ブルックナーの第3、5、7、8番を取り上げ、均等に力を注いでいる。しかも彼は、固定概念を排してニュートラルに楽曲を再構築し、立体的かつ高密度の演奏で深部や本質を顕在化させてきた。そのフラットな解釈で両者を続けて聴いたとき、いかなる感触が得られるのか？ すこぶる興味深い。

©K.Miura

ⓒ中村風詩人

ノット初の母国の大作

7月（＆川崎定期）は、エルガーのオラトリオ《ゲロンティアスの夢》。この曲は、出身地ウスターの神父がエルガーの結婚祝いに贈ったJ.H.ニューマンの長編詩に基づく作品で、死を迎える人物の苦悩と浄化が描かれている。エルガーの音楽はノーブルかつ詩情豊か。聴く物は清らかな感動に包まれる。

これは、ヘンデルの《メサイア》、メンデルスゾーンの《エリア》と共に「三大オラトリオ」と称される傑作である上に、東響におけるノット初のエルガー作品にして初の母国の大作だ（パーセルの室内楽曲とバートウィッスルの吹奏楽曲は演奏）。8〜10歳時にほかならぬウスターの聖歌隊で歌っていたノットは、そこで同曲を何度も聴いたという。一流歌手陣や彼の信頼も厚い東響コーラスと共に奏でる自国作品の演奏は、曲の真価とまだ見ぬノットの一面を知る楽しみな機会となる。

西欧と東欧の濃厚ロマンティズム

11月は、ブラームスの《ピアノ協奏曲 第2番》＆ラフマニノフの《交響曲 第2番》。“協奏曲と交響曲の大作第2番”プロであり、“西欧と東欧の濃厚ロマンティズム”プロでもある。甘美なロマンが綿々と綾なすラフマニノフの交響曲は、ノットの解析によって清新な姿が浮き彫りにされ、4楽章構成で変幻するブラームスの協奏曲も、卓越した構築力が新鮮な美感をもたらすに違いない。さらにブラームスでは、ノットが「繊細な演奏は突き抜けるほど素晴らしい」と賞賛するドイツ人ピアニスト、ヒンリッヒ・アルパースの日本デビューにも熱視線が注がれる。

近代VS.後期ロマン派、巨大編成対決

12月（＆名曲全集）は、ヴァレーズの《アメリカ》＆R.シュトラウスの《英雄の生涯》。こちらはノット十八番の“近代と後期ロマン派”プロだ。《アメリカ》は、フランスからアメリカに渡った作曲者が、直前に初演された《春の祭典》から刺激を得てニューヨークの街を描いた作品。膨大な打楽器を駆使した激烈なサウンドは、ぜひとも生で体感したい。

無伴奏フルートの名作《密度21.5》から《アメリカ》冒頭のアルト・フルートへ続く配列もノットならではの妙味。そして、5管編成でホルン8本、トランペット6本の《アメリカ》と、4管編成で同じく8本、5本の《英雄の生涯》の“巨大編成対決”は、オーケストラ・ライヴの究極の醍醐味を満喫させる。

春のロッシーニ＆シューベルト

ノットが振る他の公演では、古典派2曲の間にストラヴィンスキーを挟んだ11月のオペラシティ・シリーズの“時空往来”プロ、12月のモーツァルト／ダ・ポンテ3部作の完結編《フィガロの結婚》もむろん興味深いが、個人的な期待は、4月の名曲全集とこども定期演奏会のロッシーニ＆シューベルト・プロ。珍しくも愉しいロッシーニの《ファゴット協奏曲》と共に、チャーミングな佳作にもかかわらず演奏機会の稀なシューベルトの《交響曲 第6番》を耳にできるのが実に嬉しい。それに同交響曲はロッシーニの影響が明らかな作品。ノットのプログラミングは全てに亘って示唆に富んでいる。

まだまだある、注目の公演！

ノット以外の公演も、東響の充実した指揮者陣が本領を発揮する。5月定期では、正指揮者の飯森範親が、ナチスへの抵抗運動を題材にしたウド・ツィンマーマンの歌劇《白いバラ》の日本初演を行い、9月定期では、桂冠指揮者のユベール・スダーンが、ウィーン古典派三巨匠の“原点回帰”プロを披露。桂冠指揮者の秋山和慶も、6月定期でクララ＆ロベルト・シューマンのレア曲とブラームスの協奏曲の“三角関係（？）”プロを聴かせ、2019年2月の名曲全集でチャイコフスキーのピアノ協奏曲全3曲演奏という壮挙を実現させる。

だがこれでもまだ一部に過ぎず、ダン・エッティンガー、ロレンツォ・ヴィオッティの定期デビュー、クシシュトフ・ウルバンスキの再登場や多彩なソリストほか書き切れないほどの話題が目白押し。一年通して目を離せないとはこのことだ。